

先住民組織における参加型映像制作の実践 - 共生の技法としての映像制作 -

Participatory Video Practice with an Indigenous Association: Video-making as a Tool for Cultural Symbiosis

分藤大翼*
Daisuke Bundo

Abstract

This paper aims to describe a case of a film-making workshop, participatory video, that was held at the Bakas' association in March 2011. The Baka people living in the rainforest of the eastern province of Cameroon are finding it increasingly difficult to maintain their traditional lifestyle because of logging, mining, and the regulation of hunting. In this situation, the Baka urgently need to insist on their rights. This project provides film-making workshops for the Baka based at the Bakas' association and makes it possible for them to represent their culture and insist on their rights through visual media.

The purpose of this study is to examine the utilization of visual media in order to promote and protect the Bakas' culture through making and producing films. In addition, this study aims to construct a model for the indigenous movement by utilizing visual media based on collaborative film-making among the Bakas' associations, visual anthropologists, Cameroonian researchers, and filmmakers.

1. はじめに**

Jókò lòtì a lè (ジョコ ロティ アレ) 親しい人への挨拶の言葉で始まる手紙は、続いて「8月9日のことを覚えていますか?」と問いかける。その日が「国際先住民の日 (International Day of the World's Indigenous People)」であることを喚起するこの手紙は、バカ (Baka) という先住民 (たち) によって書かれた¹。彼らは中部アフリカのカメルーン共和国に暮らす人々であり、

* 信州大学全学教育機構准教授、Associate Professor, School of General Education, Shinshu University
E-mail: bundo@shinshu-u.ac.jp

**謝辞

本稿のもととなった調査は信州大学の平成22年度若手研究者萌芽研究支援事業の助成を得て実施した。また、使用した機器の一部は国立歴史民俗博物館の共同研究「民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究」によって購入していただいたものだった。記して謝意を表します。

¹ バカという人々は中部アフリカのカメルーン共和国、コンゴ共和国、ガボン共和国、中央アフリカ共和国の熱帯雨林地域に分布しており、人口は4万人と推定されている (Hewlett 2000)。カメルーン共和国のバカ族は1950年代から60年代にかけて施行された定住化政策によって幹線道路沿いに集落を形成するようになり、近年では多くの者が農耕にも従事している。元は狩猟採集民であり、森の中を移動しながら生活していた。現在でも数週間から数ヶ月にわたって集落を離れ、森の奥で狩猟採集生活ををする人々もいる (安岡 2011)。

狩猟と採集を主な生業として熱帯雨林地域に生きる人々である。パカ語、つまりパカ族自身の言葉で読み上げられる文面は、読者に向けられたものではなく、映像作品の音声として視聴者に聞かれるべく作成されたものである。

2011年の3月にパカ族の人々の手になる映像作品が誕生した。正確には本稿で述べる通り、パカ族以外の人々も関わることによって制作は進められた。しかし、「パカ族によるパカ族のための映像作品」が完成したことは画期的なことだった。

本稿では、この映像作品の制作の過程を記述し、映像制作の技能を持たなかった人々が、自分たちの置かれている状況を映像によって表現するに至った過程を明らかにする。そして、映像を活用することによって人々が自らの置かれた状況を改善してゆく可能性と課題について検討する。

II. プロジェクトの概要

本プロジェクトを実施した理由は次のようなものである。まず主催者である筆者が1996年よりパカ族を対象とした人類学的な調査研究を行っているということ。そして、2002年より調査集落において記録映画の制作を行っているということである。人類学者としてパカ族の生活文化を研究してきた過程で、人々が抱える様々な問題についても知ることとなった。とりわけ近年の伐採や採掘といった自然破壊の進行と、狩猟の規制といった自然保護の進行によって、その狭間で先住民の生活権が侵害されていることを強く感じさせられてきた。

パカ族の権利を守るために何ができるのかという関心から、パカ族の先住民組織のことを知り、自分の映像制作の技能を生かして協力ができないかと考えるようになった。具体的には、先住民組織のスタッフを対象に映像制作のワークショップを実施し制作技能を伝授すれば、映像を利用した活動が可能になり、そのことによって活動を新たに展開し普及させる有力な手段を提供できるのではないかと考えたのである。そして、2009年の2月にASBAK（アスパック）という組織を訪れ、代表者と面会し組織の活動への協力を申し出た。代表者は国際的な先住民運動の当事者であり、映像の可能性についても理解があったため、こちらの申し出は即座に受け入れてもらった²。

助成金を得て準備を進め、次に現地に赴くまでの間、ASBAKと協力関係にあるOKANI（オカニ）というパカ族の先住民組織の代表者とも面会し、同様の意向を伝え了解を得た³。そして、2010年の12月から渡航直前の2月にかけて、OKANIの代表者と電子メールで打ち合わせをおこなった。OKANIの代表者とやりとりをした理由は、ASBAKの代表者とは電子メールでの連絡が取りにくかったためである。最終的にASBAKの施設を映像制作の実施場所にしたのは、筆者の調査集落から最も近い町を拠点としていることから⁴、調査地域を組織の活動と繋げて、人々

² ASBAK (Assosiation des Baka) は1999年に設立され、現在は11のパカ族の集落によって構成されている。組織の目的はパカ族の権利を守ることであり、周辺化されている状況や、同じ地域に居住し主に農耕を営んでいるバントゥー系の民族に従属している関係を改善することなどとしている。そして、そのために自ら農耕に従事することや学校教育を受けることなど、自律に向けての様々な取り組みを援助団体の支援を受けながら進めている。

³ OKANIの代表者は、2010年10月に名古屋で開催されたCOP10（生物多様性条約第10回締約国会議）でスピーチをするために来日していた。

⁴ 筆者の調査集落からASBAKの施設のある町までの距離は85キロメートル。

の権利を保護する態勢を築くという狙いがあったためである。

映像制作のワークショップは2011年3月21日から25日の5日間にわたってASBAKの施設で実施した。ASBAKはカメルーン共和国東部州のロミエ（Lomie）という町にオフィスを構えている。その施設はオランダのボランティア財団SNVの施設を引き継いだもので電気も利用できるため本ワークショップの会場とした。

筆者がワークショップのために持ち込んだ機器は以下のものであった。小型ビデオカメラ2台、三脚1台、小型の録音機1台、プロジェクター1台、映像編集用のノートパソコン1台。これらに協力を依頼したカメルーンの映画作家が所有するパソコン1台を加えて制作に臨んだ。

参加者として、ASBAKから3名（以下ではA、B、Cと記す）とCADDAP（カダップ）という、やはりバカ族の権利を保護することを目的とした組織から2名（以下ではX、Yと記す）を招いた⁵。CADDAPのメンバーを加えた理由は、ロミエから最も近いアボンバン（Abong Mbang）という町を拠点にしており、ASBAKとも繋がりがあがる組織であること⁶。また、組織による活動や認識の違いなどを知るためである。ASBAKの3名は、Aは20代、Bは30代、Cは40代のバカ族の男性。CADDAPの2名は20代の女性で、それぞれマカ（Maka）、ジメ（Nzime）という別の民族の出身者であった。参加者の選出は、それぞれの組織に委任した。

加えて、ワークショップの講師としてカメルーンの映画作家1名とアシスタント1名（以下では講師D、講師Eと記す）に協力を依頼した。講師はいずれも男性で、講師Dはフランスで映画を学び国際的な映画祭において受賞歴もあるカメルーンを代表する40代の映画作家⁷。そして、講師Eは講師Dのアシスタントとして映画制作に携わっている20代の男性である。ワークショップは主に講師Dが進行を担当し、筆者は状況の観察と記録に従事した。使用した言語はフランス語で、参加者は全員フランス語の読み書きを習得しており、言語力に起因するコミュニケーションの問題はほとんどなかったものと思われる。

III．映像制作ワークショップの過程

5日間にわたって実施したワークショップの工程を簡略に表に示した（表1）。ワークショップの構成は、5日間で短編作品を完成させるという目標から、最終日が「上映・討論」、その前日が「編集」、その前日が「撮影」と、後半の3日間については必然的に決まった。しかし、どのような作品にするのか、制作を始める上でどのような導入が有効かということについては、現場の状況にもよるため予め打ち合わせはしなかった。結果的に実施した1日目の「先行作品を視聴し討論する」というアイデアと作品の選定は筆者が、2日目の「シナリオを手紙の形式で作成する」というアイデアは講師Dが出したものだ。以下では時間の流れに沿ってワークショップの内容を記述してゆく。

⁵ CADDAP（Centre d'Action pour le Développement des Autochtones Pygmées）は2000年に設立された組織。代表者はバカ族の女性、他のスタッフはバカ族以外の民族の出身者によって構成されている。拠点としているアボンバンという町にはバカ族の集落はない。

⁶ ロミエとアボンバン間の距離は127キロメートル。CADDAPの代表者とASBAKの代表者は、かつて共にSNVで働いていた。

⁷ 筆者は講師Dと2006年より親交を深めており意思の疎通がはかりやすい関係にある。

表1 映像制作ワ - クショッの工程

	3月21日	3月22日	3月23日	3月24日	3月25日
	既存の映像作品の上 映・討論 a: CED (カメル ーンのNGO開 発・環境センタ ー)制作作品 c: National Geographic制 作作品	シナリオの作成 a: 手紙の執筆、発表 b: 一通の手紙にまと める	集落における撮影	映像編集の実習	仕上げの編集
	バカ社会の問題点の 列挙	三脚を使った撮影実 習	撮影した映像の粗編 集 (パソコンへの映 像データの取込)	仏語のシナリオをバ カ語に翻訳	完成作品の上映・討 論
	撮影実習	集落における撮影の 趣旨説明	追加撮影	シナリオ朗読の録音	
			シナリオ朗読の録音		
備考	ASBAKの3名で開 始。	CADDAPの2名が参 加。			CADDAPの2名が辞 退。カメルーンの人 類学者1名が参加。

注：本表における 、 、 、 a、b、cという表記は本文の節の番号、記号に対応している。

(1) 3月21日

既存の映像作品の上映・討論

映像の制作に取りかかる上で、映像作品について具体的に知ってもらうために、バカ族を対象とした2本の作品を視聴してもらうことにした。そして、視聴しながら良い点、悪い点についてメモをとってもらい、視聴後にそれらの点について話し合うことによって、自分たちの作品のイメージを作り上げてゆくことにした。作品のDVDをパソコンで再生し、プロジェクターを使って会場の壁面に上映した。CADDAPの2名はこの日到着しなかったため、ASBAKの3名を対象にワークショップを開始した。

a. “Les Pygmées Baka, entre tradition et modernisme”の視聴

「バカ・ピグミー - 伝統と近代化の狭間で - 」と題された作品は、CED (開発・環境センター) というカメルーンのNGOが制作した作品である⁸。監督はカメルーン人のアレン・フォング (Alain Fongue)。35分の作品の概要は以下のようなものである。

ナレーションを軸に、NGOのスタッフやカメルーンの研究者、バカの代表者や若者のインタビューを織り交ぜて、経済的、文化的に変容の著しいバカ社会の様子が描かれる。前半では、伐採などによる森林破壊や森林における狩猟活動が制限されること

⁸ CED (Le Centre pour le Développement et l'Environnement) は、カメルーンの森林管理の危機的な状況を受けて1994年に設立されたカメルーンのNGOである。ワークショップで視聴した作品はウェブ上で公開されている。
<http://www.sudplateau-tv.fr/cinema/item/35-les-pygm%C3%A9es-baka-entre-tradition-et-modernisme-de-alain-fongue> (2011年10月24日)

によって、バカの人々が狩猟民として生きていくことが困難になっている状況が紹介される。そして、後半では、そのような状況にあっても伝統的な様式を守って精霊儀礼が実施されている様子が紹介され、さらに、若い世代を中心に、新たな事態を引き受けながら生きようとしている姿が描かれている。

b. コメント

3名のコメントのうち共通していたことは、良い点として精霊儀礼における歌や踊りが挙げられたことであった。この精霊儀礼はジェンギ (*jengi*) と呼ばれる精霊と、そのもとに組織されている男性の秘密結社への加入儀礼の様子だった。関連する点として、儀式の秘密の部分については撮影していなかったことが良い点として挙げられ、逆にバカ独自の儀礼であるにもかかわらず、作品中では他の民族の人々も関わっているように見えるところが、悪い点として挙げられた。また、集落の代表者や、老人から若者まで、様々な立場の人が語っている点を3名とも高く評価した。特にBは老人がバカ語で話し、それがフランス語に訳されて字幕になっていたところを良い点として挙げた。

他には、近年バカの人々が農作物などを売買していることを取りあげている点に関心が集まった。例えば、Cは取引が具体的に描かれていないことを悪い点として挙げ、Bは不十分ではあっても取りあげていることを良い点として挙げた。

個性的なコメントとしては、Aが作品中に登場した青年がバカ社会の発展や未来に希望を持っていたことを良い点として挙げたことや、Bが作品中の若い女性が町に暮らす女性のように髪を編んでいたことを悪い点として挙げたこと。また、Cが語りと映像の内容が一致していないシーンがあったと指摘したことなどがあつた。

最後に、講師Dが作品のタイトルに *Pygmées* (ピグメ) という言葉が付いていることを指摘し、不適切であり付けられない方が良いのではないかと問いかけた⁹。それに対して、特にBが強く同意した。

c. “Les Voix de la Forêt” の視聴

「森の声」と題された作品は、国際的に著名な National Geographic によって制作されたものである¹⁰。1本の番組の中にカメルーンのバカ族のことだけでなく、ガーナ共和国の葬式や奇抜な棺桶文化の紹介が挟み込まれている。そのため、後者の場面は割愛して視聴した。視聴時間は40分ほどになった。本作品の概要は以下のようなものである。

上空から見た森の光景に始まり森の中で談笑する人々の姿が描かれ、続いてボスケという集落の様子が紹介される。豊かな森の動植物と、その森の恵みを受けて生きる人々、特に銃を携えて森の奥で狩猟を行う男たちの姿が描かれる。その一方で、森の木々が違法に伐採される事態に対して人々が集会を開き、森を守るために集落の代表者たちが町に出かけ、知事に陳情する姿が描かれる。最後は自分たちで森を守ろうとする人々の姿と、否応なく進む伐採の様子が対比され、森とバカの人々の暮らしに暗

⁹ *Pygmées* は低身長という形質的な特徴に対して付けられた俗称であることから、今日では使われなくなってきた。

¹⁰ National Geographic 協会は1888年に設立され、以後、探検家や研究者の活動を支援し、その成果を記録に残し、雑誌や記録映像番組として公表している。

い影が落ちている状況が描かれて終わる。

d . コメント

3名が共に良い点として挙げたのは、伐採に対して人々が立ち上がり、知事に陳情に行ったことであった。また、森の動物たちが生き生きと描かれていた点も良い点として挙げられた。逆に悪い点としては、森の木々が伐採される様子や、銃を使った狩猟のシーンにおいて、狩猟の許可を取っているかどうかを示されていないことが挙げられた。さらにAとCは、場面がガーナ共和国の事柄に切り替わることがあった点を挙げて、混乱したと述べた。加えてCは、銃で仕留めた獲物が映像からは何なのかということが分かりにくかったため、字幕で示すべきだったと言った。

e . まとめ

視聴後に2作品を比較してコメントをするように講師Dが提案し、どちらの作品が好ましいかという話しになった。そこで、3人は揃って1本目の作品を挙げた。理由は、儀式など伝統的なことが描かれているからだとのことだった。Cは自分たちが生きているのは1本目の作品の世界だと言った。

筆者にとって、この意見は意外だった。むしろ、先住民組織のスタッフとして、権利が侵害されている状況に立ち向かおうとする2本目の作品の方が高く評価されるのではないかと思っていたからである。特にBは2本目の作品を挙げるのではないかと筆者は思っていた。理由は、2本目の作品の舞台となった集落がBの出身集落であり、彼自身が作品の中に何度も登場するからである¹¹。しかし、彼らはむしろ伝統的な文化が描かれている作品の方を好んだ。守るべき文化を明示した方が、権利の保護に繋がるという考え方なのかもしれないが、この点は確認が取れなかった。

これらの作業を通じて、3人の映像作品に対する意識や認識は確実に高まったと思われる。最初の作業として先行作品を視聴し討論したことは良い選択だった。また、筆者はこれまでにバカ族を対象とした数々の記録映像を視聴してきているが、バカ族の人々と共に視聴し、コメントを聞く機会は乏しかったため、今後の自分の研究や制作に向けて、たいへん有意義なワークショップとなった。

バカ社会の問題点の列挙

次に、自分たちの映像作品を制作するにあたって、バカ社会の問題点を洗い出す作業を行った。この作業は講師Dが3名に対して「ASBAKはどのような目的で活動しているのか?」「バカ社会にはどのような問題があるのか?」「～は問題ではないのか?」「バカは～な人々だと思われているが本当か?」などと問いかける形で進行した。そして、各人に問題点を書き出してもらった。1時間近く話し合った結果、以下のような問題点が挙げられた。

バカの土地の境界が明確ではないこと。他の民族よりも劣っていると見なされていること。人権が蔑ろにされているということ。学校教育が普及していないため優秀な人材が乏しいこと。出生証明書を取得していない者が多いということ。森林の開発に関与できていないこと。病院での治療がまともに受けられないこと。バカの女性が他の民族の男性と接

¹¹ Bは知事のところに陳情に行く代表者4人の内の1人でもあった。

触することによってHIV/AIDSをはじめとした新たな病がバカ社会に入ってきていること。金銭の管理能力が乏しいこと。他の民族への隷属的な関係があること。狩猟に規制がかけられていること。森林が消失していること。鉱山開発が進行していること。NGOが乱立し関与が過剰になっていること、バカの男性が他の民族の女性と結婚することが難しいということ。話し合いを通して講師Dが書き記した問題点を多少敷衍して挙げると以上のようになる。

AとCのメモは、いずれも講師Dのメモの範囲に止まっているが、Bのメモには加えて、収賄があること、身分証明書を取得していない者が多いということ。自由に発言する権利が与えられていないこと。水の問題。伝統的な儀式の消失。バカの首長が他の民族の首長たちから尊重されていないことなどが挙げられていた。

これらの問題点が挙げられたことを受けて、バカ社会の窮状を訴える手紙を書くことを講師Dが提案した。講師Dは多くの問題があることを手紙の形で表現できれば、その手紙が映像作品のシナリオになると説明した。手紙は映画のようなものであり、映画は手紙のようなものであるという説明を受けて、A、B、Cは明日までに手紙を書いてくることを約束した。座学が長くなり疲労感が出てきたということもあり、この後は撮影実習を行うことにした。

撮影実習

はじめにビデオカメラの使用方法について説明し、次に実際にカメラに触れながら使い方を習得してもらった。そして、撮影について、バストショット（胸から上）、フルフィギュア（人物の頭から足先まで）、フルショット（全景）の3つの被写体の撮り方（山登 2006）を教えて、対象をフレームの中央で捉えるように、またカメラを安定させるように指示した。そうして、まずは屋内で壁のポスターや机の上のペットボトル、壁際に立った人物などを撮る練習をした。そして、屋外に出て、建物や看板、自動車やヤギの群れの撮影を行った。さらに、カメラの前で自己紹介をもらい、その姿を撮影した。そうすることによって、撮ることと併せて撮られることも体験してもらった。そして、会場に戻って撮影した映像を上映し、指示通りに撮影できているかどうかを検討した。3名は楽しげにこの作業に参加し、積極的に撮影の技法を習得する姿勢が見られた。

最後に、このワークショップは利益目的で実施しているものではなく、ASBAKの活動に役立てるためにボランティアで開催されているものであること。したがって、5日間にわたってワークショップを続けるかどうかは、参加者の意欲と取り組み次第であることを確認して1日の作業を終えた。この日のワークショップは10時前に始めて昼食抜きで17時半頃まで行われた。

(2) 3月22日

シナリオの作成

A、B、Cは8時には会場に来ていたものの昨夜の宿題であった手紙は書き上げていなかった。CADDAPの2名（XとY）が到着したこともあり、前日に挙げられたバカ社会の問題点を復習し、改めて全員が手紙を書くことになった。これには講師Dも加わった。そして、書き上がった手紙を全員が朗読した。

自分たちが抱える問題を手紙の形式で表現すること、また手紙を映像作品のシナリオに

するという方法は、本ワークショップの制作において有効な方法だと思われた¹²。しかし、実際には数々の問題点を手紙のなかに書き込むことは容易なことではなかった。6名の手紙を検討したところ、先に列挙した事柄も手紙にすると取り込めないという事態が生じていることが分かった(表2)。

表2 ワークショップ参加者6名が挙げたバカ社会の課題

バカ社会の課題	講師D	B	A	C	X	Y
学校教育の普及						
疾病対策・治療の改善						
他民族との対等な関係						
土地所有、区画の明確化						
周辺化、被差別状況の是正						
人権の要求						
出生証明書の取得						
森林開発への関与						
農耕の普及						
金銭の管理						
11 異民族間における結婚						
身分証明書の取得						
首長の尊重						
狩猟規制の緩和						
森林消滅の抑制						
16 鉱山開発の抑制						
収賄の抑制						
婚姻証書の取得						
19 NGOの乱立						
20 発言権の獲得						
21 水の利用						
22 伝統的な儀式の消失						
⑳ 商売の普及						

注：事前の話し合いによって挙げられていたバカ社会の課題と、ワークショップ参加者6名が各自の手紙の中で取りあげた課題を印で示している。課題は取りあげた者の人数が多いものから順に並べている。番号が丸で囲まれているものが、シナリオに採用された項目である。23の「商売の普及」は各自の手紙の中では取りあげられなかった項目だが、議論を経て最終的なシナリオには採用された項目である。

前日のワークショップで挙げられたバカ社会の問題点・課題のうち、6名が手紙の中で取りあげているものを調べてみたところ、先に最も多くの問題点をメモしていたBや講師Dでも書き落としている項目があることが分かった(表2)。また、BやAが比較的多くの項目を取りあげられているのは、手紙の中で問題点を箇条書きにしていたためである。C、X、Yが多く項目を手紙に盛り込めなかったのは、手紙らしい書き方をした結果とも考えられる。

この検討から、6名がそれぞれに関心を持っている事柄と、共通して関心を持っている事柄が

¹² 手紙を映画のシナリオにするという方法は、講師Dがフランスの映画学校FEMIS (Fondation Européenne pour les Métiers de l'Image et du Son) で教わった方法である。

明らかになった。表2のバカ社会の課題の欄は、最も多くの者に取りあげられたものから順に並べている。学校教育の普及、疾病対策・治療の改善、他民族との対等な関係などは6名中5名が取りあげた項目であり、特に関心を集めている事柄ということになるだろう。

朗読後、講師DがCに今後の作業の方針を尋ねたところ、講師DとXの手紙が問題をよりよく取りあげていると発言したため、それらの手紙をベースに一通の手紙にまとめる方向で作業が始まった。再度バカ社会の問題点について議論になり、さらにポイントが明確になっていった。その後、BがXと共に手紙を書き直し、それをもとに講師DがBとXと共にパソコンで書き直しを行い、シナリオが形になっていった。一通り書き上がったところで読み上げて、さらに不明確な箇所を議論し、表現を詰めていった。

結局、このシナリオの制作には5時間ほどの時間が費やされたが、この作業は結果として出来上がったシナリオ以上の成果があったと筆者は考えている。この間の議論は、ASBAKのバカ族の男性たち、CADDAPのマカ族とジメ族の女性たち、そして講師となった首都在住の映画作家という、これまでに顔を合わせることのなかった人々が真摯にバカ社会の問題点について話し合う機会となっていた。

最終的に完成した手紙は次のようなものである。

拝啓

8月9日（国際先住民の日）のことを覚えていますか？

私たちの抱える問題について知ってもらうために手紙を書きます。

私たちバカはとても苦しんでいます。

私たちはバントゥーの人々によって、蔑ろにされ虐げられています。

私たちは自らの権益を守るために、幾つもの協同組織を設立するに至りました。

私たちは土地に関わる多くの問題を抱えています。村々の境界はいまだに定められていないのです。

人権についていうと、森の民であり、コンゴ盆地の守護者である私たちは、世界中の人々と同様に、その権利を有しているはずですが。

私たちの権利が、いつも踏みにじられるのはなぜなのでしょう？

私たちは教育を受け、カメルーン社会において尊重されるようにならなければいけません。

私たちの社会は、自らの森や権利を要求できるような優秀な人材を欠いています。りっぱな国民になるため、私たちの子どもは、これからは学校に通います。

私たちは既に出生証明書や身分証明書を取得しています。私たちは国政や投票に参加すること

もできるのです。

森はもう私たちのものではありません。開発の進行とともに、森は失われています。

私たちの社会を徐々に破壊するような、大きな産業プロジェクトがいくつもあります。けれども、私たちは長きにわたって、今日狙われている、その森の守護者だったのです。

森の集落に暮らす者に対して、狩りをするのが禁じられています。この先、私たちはどうなってしまうのでしょうか？

村では、首長を選出することに苦心しています。彼らは他の首長たちよりも軽んじられているのです。

定期市では、いつも思うように商品売ることができません。値段は買い手によって決められてしまいます。脅しや仕返しに直面して譲歩せざるを得ないことがあるのです。

病院において、私たちは他の全ての患者たちとは違って、適切に対処してもらえません。バカの女性たちは追い返されることも多いのです。

私たちはもはや遊動民ではありません。既に集団で畑仕事をしています。私たちは適切な報酬が得られないような仕事はしたくないのです。

バカに対する悪いイメージを払拭したいのです。一般に考えられているのとは逆に、私たちは多くのチャンスに恵まれています。

あなたが私たちの資源管理を援助してくれることを願っています。

私たちは十分な金銭を持っておらず、また、御存知の通り、金銭は私たちの習慣にはなかったものなので、私たちの努力を台なしにしてしまうような収賄があることも事実です。

バカの女性たちは結婚証明書が有用であることをまだ知りません。

そうなのです。国際的な協調の場において、私たちには言うべきことがあるのです。

先に挙げられた問題点のうち多くのものが盛り込まれた内容になったといえる。表2の番号が丸で囲まれているものが、最終的にシナリオに入った項目である。特異な項目として23番のバカ族による商売に関わる課題が挙げられる(表2)。これは各人の手紙の中では取りあげられなかったものだが、議論を経て最終的なシナリオには採用された項目である。

三脚を使った撮影実習

シナリオが作成された時間、直接関わっていなかった者を対象に、講師Eが三脚を使った

撮影実習を実施した。その後、撮影した映像を上映し、安定した映像の撮影方法とその効果について話し合った。

バカの集落における撮影の趣旨説明と協力依頼

シナリオに相応しい光景を撮影するためには、バカ族の集落で撮影する必要があった。話し合いの結果、Cの出身集落が選ばれ、撮影の趣旨を説明するために町から10キロメートルほど離れた集落を訪れることにした。

集落の人々への挨拶に始まって、Bが撮影の趣旨を説明し、さらにCが同様に説明を行って協力を呼びかけた。さらにBがシナリオの解説をし、講師Dの提案に基づいて撮影が必要なシーンについても説明が行われた。この説明がすべてバカ語で行われたことによって明らかになったことは、バカ語ができないCADDAPの2人や、また講師たちだけでは、このような制作は極めて困難だということであった。

(3) 3月23日

バカの集落における撮影

前日に訪れた集落で9時前から撮影を開始した。1台のカメラをAとCが、もう1台のカメラをXとYが使用し、Bはシナリオを手に撮影の段取りをする役割についた。講師Dは「自分たちで考えて撮影するように。また、撮影が必要なシーンがたくさんあるので、1つのシーンにつき10分ほどの撮影時間で次々と撮るように」と指示を出して、以後はあまり関わらないようにしていた。対して講師Eは2台のカメラを行き来しながら撮影の指導していた。

表3 撮影されたシーン

1	畑で作業する人々
2	集落で作業する人々
3	狩猟する男性
4	怪我の治療
5	森の木々
6	道路を歩いてやって来る人々
7	校庭の子供たち
8	歌い踊る人々
9	証明書を持った子供たち
10	集落の掲示板
11	家の前に立つ村長
12	家の前に座る女性と子どもたち
13	集会所で手紙を書く男性と周囲の人々
14	髪を結う女性たち
15	酔っぱらいの真似をする男性
16	病院の看板
17	援助団体の看板
18	木材を積んだトラック
19	市場の様子
20	集落の人々の様子

注：撮影された順序で表記している。1～15は23日の午前中に撮影された。16～20は同日の16時以降に追加撮影された。

3時間ほどの間に15のシーンが撮影された(表3)。前日の説明のおかげか、集落の人々はとても協力的だった。撮影されたシーンのうち、「11.家の前に座る女性と子どもたち」のシーンと「14.髪を結う女性たち」のシーン以外は、撮影者によって演出されたもの、言い換えれば被写体となった人々が演技をしているシーンとなった(表3)。しかしこれらのシーンにおいて、人々は躊躇することなく、むしろ嬉々として演じているように見えた。

撮影した映像の粗編集

町に戻って撮影した映像データをパソコンに取り込む作業を行った。映像編集ソフトを使って作品に使いそうなシーンを選んでファイル化する作業には、講師Eの指導のもとCADDAPの2名のみが従事した。ASBAKの3名は作業の進行を見ているだけだった。編集作業に入ったところで各人のパソコン操作の習熟度が露わになった。

追加撮影

粗編集を行ないシナリオに対して不足している映像が明確になったところで、追加撮影が行われた。この撮影には講師EとA、B、Xの4名が参加し、5つのシーンが新たに撮影された(表3)。そして撮影後、映像データのパソコンへの取り込み作業が行われた。

シナリオ朗読の録音

フランス語版を制作するために、シナリオの朗読を録音した。しかし、会場は道路に近かったため車のエンジン音や、施設にいる人々が出す音や、裏庭からの虫の音などが妨げになり、改めて録り直すことになった。

(4) 3月24日

映像編集の実習

パソコンの画面をプロジェクターを使って会場の壁面に映し出し、編集ソフトの基本的な使い方を教示した。そして、2台のパソコンを使って映像編集の実習を行った。CADDAPの2名に講師Dが、ASBAKの3名(Cは途中から組織の他の用事で退出)に講師Eがついた。この作業はメンバーを替えながら断続的に夕刻まで続けられた。しかし、編集作業はワークショップの参加者たちにとってたいへん難しかったようで、Xは途中で作業を放棄した。

シナリオのバカ語への翻訳

シナリオ作成の段階までは、参加者全員が理解できることが前提であったためにフランス語によって作業が行われた。しかし、制作する作品はフランス語を知らないバカ族の人々にも理解してもらうことが必須であることから、フランス語のシナリオをバカ語に翻訳する作業が行われた。この作業はBが中心となってAとCが協力して進められた。バカ語にしづらい表現が多く作業は難航したが、数時間を経て翻訳は完成した。最終的に訳しきれずフランス語の言葉が残ったのはdroit「権利」と、citoyenという「市民」を意味する言葉だった。

シナリオ朗読の録音

前日に試みたシナリオ朗読の録音は雑音が多く作品には使えないと判断したため、この

日は近くにあるラジオ局に行き、交渉してスタジオを使わせてもらって録音を行った。Yがフランス語のシナリオを朗読し、Bがバカ語のシナリオを朗読した。幾度かの録り直しを経て、一通りの録音を終えた。これで映像作品の制作に必要な全ての素材が揃った¹³。

(5) 3月25日

仕上げの編集

前日の実習では、編集作業の概略を知ってもらう程度のことしかできなかった。そのため、作品の編集は、ほぼ全て講師Eが深夜にかけて1人で行うことになった。最終日の朝を迎えて、会場では編集の仕上げが行われ、ついに6分ほどのフランス語版とバカ語版の作品が完成した。

講師Eによって編集された作品では、撮影した20シーンのうち17シーンが使われていた。使われなかった3つのシーンは「3狩猟する男性」「4怪我の治療」「10集落の掲示板」であった(表3)。これらのシーンが使われなかった理由は、シナリオに合わなかった。映像の流れに合わなかった(前後の映像との兼ね合いがはかれなかった)。映像自体が良いものではなかったなど幾つか考えられる。また、17のシーンのうちXとYが撮影したシーンは「5森の木々」のみで、残りはAとC、とくにCが撮影したものだ。その理由は、XとYはビデオカメラを手で持って撮影しており、映像に安定感が乏しかったということ。カメラを動かさずに対象をしばらく撮影するということができなかったことなどが考えられる。対して、AとCは三脚を使って撮影していたため、安定した映像が撮れていた。加えて講師たちは「Cは撮影のセンスが良い」とも言っていた。

完成した作品は、後に筆者が検討したところ、映像と語りが一致していない箇所が幾つかあることが発覚した。講師Eのために、バカ語による朗読とフランス語のシナリオとの対応が分かるように資料番号を付けるなどして作業をサポートしたが、やはりバカ語が理解できない者による編集には限界があった¹⁴。

完成作品の上映・討論

完成作品の上映・討論には、バカ族の調査のために前日に到着したカメルーンのヤウンデ大学の大学院生が1名参加してくれた。CADDAPの2名は、この日の早朝に帰ったため不参加となった。

視聴後、感想を順に話すことにした。しかし、Aはあまり的確な発言ができず「良い」ということ以外は明確な感想が聞かれなかった。Bはフランス語版だけでは分からない人もいるが、バカ語版もあることでバカの人々にとって分かりやすいものになっていることを高く評価した。また、作品全体がバカ族によって書かれた手紙のようにになっているため、メッセージはよく伝わると思うと述べた。そして、人々の問題意識を喚起する上で役立つだろうと締めくくった。Cは畑仕事をする人々のシーンに関して、「もはや遊動民ではない」

¹³ Yが朗読したフランス語のシナリオの音声は、講師らの判断で採用されなかった。理由は録音を行ったスタジオ内の機器のノイズが入っているということと、フランス語は字幕で示せばよいということだった。筆者もこの判断に同意した。

¹⁴ これらの箇所については、筆者が帰国後に修正した。この修正によって「15 酔っぱらいの真似をする男性」のシーンも削除された(表3)。理由はシナリオと映像が合っていなかったためである。

ということと「不払いで働きたくはない」という内容の異なる語りが入っているのに対して、映像が同じ畑仕事の光景なのは奇妙だと指摘した¹⁵。また、ワークショップによって、初めてカメラの扱いや撮り方が分かった。自分でもできるということが分かったと述べ、完成した作品を見て改めてワークショップを通じて得たことに気がついたと続けた。そしてワークショップに感謝し、このワークショップで得たことをこれから生かしてゆきたいと締めくくった。

大学院生は、まず映像が安定しており見やすかった点を褒めた上で、次にシナリオの内容については、私たち（バカ）と彼ら（バンツー系の民族）が対立的に描かれていることを、不適切ではないかと指摘し、相互理解が可能な間柄として描く必要性を指摘した。講師Dは、その指摘を受けて、映像制作が共同作業であったようにバカとバントゥーも同じ共同体に生きる者として協調することが必要ではないかと述べた。そして、ワークショップを通じて作品が完成したことで、この作品をもとにさらに作品を制作することができるはずであり、これからは自分たちの手で自分たちのための映像作品を制作することができるはずだと述べた。そして、作品の制作に完璧ということはなく、今回の作品にも多くの問題が残されてはいるものの、この5日間は無駄ではなかったと思っている。満足していると話を結んだ。

この後、小型のビデオカメラをASBAKに進呈し、ワークショップの全工程を終了した。別れ際に、AとBは改めて意義のあるワークショップであったことを筆者に話してくれた。完成した作品は、後日、講師DとEによる修正を経てDVDに収録したものをASBAKとCADDAPに贈った。

IV. プロジェクトの問題点

(1) 組織間の連絡、あるいは関係

本プロジェクトはバカ族の3つの組織の協力を得て実施した。プロジェクトを実施するにあたってOKANIの代表者と電子メールで連絡をとり、ワークショップの実施概要を伝え、ASBAKへの連絡を依頼した。しかし、第一にこのOKANIとASBAKの間の連絡が不十分だった。これはワークショップ開催直前の17日にASBAKの代表者と直接会った際に、先に連絡してあった日取りを把握しておらず、改めて説明する必要があったことから推測できる。また、代表者はスペインで開催される会議に出席するため、ワークショップの期間中は不在であることが、この時に発覚した。第二にASBAKとCADDAPの間の連絡も不調だった。ASBAKの代表者と面会した翌日、18日にASBAKのオフィスでスタッフと打ち合わせをした際に、CADDAPと連絡をとって2名の参加者を招聘するように依頼した。しかし、ワークショップの初日を迎えてもCADDAPからの参加者は来ていなかった。これはCADDAPの代表者がスタッフをワークショップに参加させるか否かの連絡をとらなかったことが原因とのことだった。ASBAKのスタッフは「CADDAPはいつもそうだ」と非難の言葉を口にしていた。

後者については、筆者とCADDAPの代表者とは面識がないため、主催者である筆者への不信任感からスタッフの参加を保留していた可能性も高い。しかし、前者については双方の代表者と

¹⁵ 興味深いことに、Cには映像を分析的に視聴する能力がある。

も面識があり、それぞれの代表者は筆者に対して協力的であることから、組織間の、あるいは代表者間の関係に問題があることを伺わせた。筆者はOKANIの代表者が「ASBAKの代表者は兄弟のようなものだ」と言っていたことを半ば頼りにしていたが、やはり実際は組織として競合している面もあるはずで、共同するのは容易ではないことが伺えた。それは打ち合わせの際に、OKANIのスタッフを招聘するか否かという議題に対して、「OKANIはすでに映像制作のワークショップなどの援助を受けている」という理由を挙げて、招聘しない方向にASBAKのスタッフが話を誘導したことに表れていた。

このような組織間の関係は、ワークショップ期間中にOKANIの代表者が筆者を訪ねて来た折りの言葉にも表れた。OKANIの代表者はワークショップの開催直前まで海外の会議に出張中だと聞いていたため、初日のワークショップが終わった後に電話で連絡をとった。すると彼はOKANIのスタッフも参加させたいと申し出た。しかし、既に5名の参加者が決まっており、人数が増えると運営上支障が出るのが分かっていたため断ったところ、翌日に本人がイギリスのInsightShareという映像制作を行う組織の男性を伴って会いに来た。目的は、カメルーンで筆者と再会することと、InsightShareとの企画を紹介すること。そして、ワークショップを視察することだった。その際に彼は「なぜASBAKなのか？CADDAPの2人などは、この経験を生かせないのではないか」と苦言を呈した。また、共同する相手を選択する際は必ず相談するように言った。翌日、今回のワークショップには関われない状況を察して彼は去った。

これらのことからワークショップの対象とする人々とは直接会って交渉する必要があること。また、組織の選択や複数の組織と共同する際には組織間の関係に注意が必要であることが分かった。これらのことは、一般論としては当たり前のことかもしれないが、バカ族の先住民組織間の具体的な状況は、やはり今回のようなワークショップを実施したことによって初めて知ることができた。

(2) 実施費用

ワークショップの実施費用も問題点の一つである。必要な機器の購入費用やカメルーンの映画作家に対する謝礼や滞在費用を筆者が負担することは、初めから予定していた。誤算だったのは、参加者に対して参加費用を支払わなければならないということだった。事前の話し合いで、こちらは無償で映像制作の技能を教授すると伝えてあった。そのため、参加者には参加にかかる費用については負担してくれるものと想定していた。しかし、ASBAKのオフィスで打ち合わせをした際に、最初に話題に上ったことは、それぞれの参加者に対して費用がどれだけかかるのかということだった。交通費、宿泊費、食費とパソコンで丁寧に作成された「費用の概算」を手渡された時はいささか困惑した。

結局、こちらが全ての費用を負担することにしたが、ワークショップの期間中も何かにつけて金銭のことが問題になった。「移動に使用したASBAKの車のガソリン代が必要だ」「集落の人々に振る舞う酒代が必要だ」等々の要求が続いた。そして、その最たるものがワークショップの4日目にCADDAPの2人が突きつけた要求だった。その日の編集作業で疲弊した2人は、うち1人の子供が病気になったという理由で最終日の早朝に帰ることを希望した。筆者は、それは当然のこととして了承した。しかし、困惑したのは彼女たちが最終日の食費と宿泊費を要求してきたことだった。さすがに不参加の日の費用を払うわけにはいかないため断ったところ、特にXと講師Dの間でたいへんな口論になった。結局彼女たちはあきらめて立ち去ったが、強い不信感を残す結果となってしまった。CADDAPにせよASBAKにせよ、持ち込まれた企画において支出するつもりは全くないという感じだった。むしろ、Xなどは参加者に対して謝礼が支払われ

るべきだという感じですらあった。この認識の齟齬には今後十分な注意が必要だろう。

先住民組織はそれぞれに援助組織から金銭等を受け取ることによって運営されている。また組織で働く者は、その金銭を給料として得ることで生活している。言わば「援助されることによって生活している」人々と共同する難しさは、特に金銭をめぐるトラブルとして顕在化することを痛感させられた。今回のようなワークショップを援助活動の類という認識のもとで実施すると、その費用は主催者側が全て賄うことになる。実施費用を見積もる際には、参加者と十分に話し合った上で、参加者の数や、期間を考慮して算定しなければならないだろう。

(3) 映像制作習得の必要性

ワークショップの参加者は、映像制作の可能性と課題を体験的に学んだ。「やればできることが分かったことは収穫だった」とASBAKのメンバーは言ったが、この経験がどのように生かされるのかは、今後の彼らの活動を調べてみなければ分からない。

筆者には、今回のような企画が再び持ち込まれない限り、彼らが自ら技能を磨き、映像を制作するようなことはないように思える。特に習得が困難な編集作業を彼ら自身が進んで行うようになる可能性は低いように思える。しかし、これをきっかけに援助として映像の制作を要請し、外部のスタッフによる制作であっても、彼らが積極的に関わることはありうと思う。また、今回制作した作品を上映することによって、新たな活動の道が開け、新たな援助の獲得に繋がるようなことになれば、映像制作への意識や意欲がさらに高まるかもしれない。

(4) 完成した映像作品について

作品の特徴は手紙の様式をとったシナリオにある。このシナリオについては、既に詳述したとおり、参加者が議論を通じて練り上げたものであり、さらなる議論を呼ぶという点においても優れた成果となっている。しかし、シナリオが優先しているため、映像はシナリオが喚起するイメージを補うものになっており、シナリオに対する適切さや効果を検討すれば、大いに改良の余地が残されている。特にシナリオに沿って撮影を行ったため、ほとんどのシーンにおいて被写体となった人々に演じてもらって撮影が行われた。つまりバカ族の人々の現状を記録した作品とは言えないという特徴を本作品は持っている。

また、編集を参加者ではなく講師や筆者が行っている点は、本作を先住民組織の人々が制作した作品とは言い切れない要因となっている。しかし、編集作業を映像制作に初めて携わる者が行うのは極めて困難であることから、対象となる人々と共に試作品を何度も視聴し、編集上の問題点を探って技能のある者が再編集を行うという作業が、今後の有望な取り組みになるだろう。

V. まとめ 共生の技法

バカ族の先住民組織において映像制作のワークショップを実施し、バカ族の人々と共にバカ族のための映像作品を完成させる。このプロジェクトの目標は紆余曲折を経て達成された。その詳細は既述したとおりであるが、カメルーンから帰国した後に知り得た事柄をあわせて、最後に今回のプロジェクトを振り返り、今後の可能性と課題についてまとめる。

第一に、事前の調査が不十分だった点として、OKANIがInsightShareという映像制作の組織と共同していることを知らなかったということが挙げられる。InsightShareは90年代より活動を始

めた2人の男性が2003年に立ち上げた組織で、現在では13名ほどのスタッフによって運営されており、世界各地でParticipatory Video（参加型映像制作）という手法によって数多くの作品を制作・発表している。

人々が自らの置かれている状況を把握し、その状況への積極的な関与を促すツールとしてビデオを利用するという動きは、1960年代半ばのビデオの誕生とともに始まっている（Robertson and Shaw 1997, White 2003）。Participatory Videoと呼ばれる活動は、80年代より活動を開始したクリーブ・ロバートソンとジャクリ・ショウによって、活動の手順やアイデアを紹介する書籍としてまとめられ（Robertson and Shaw 1997）¹⁶、その後、理論的、実践的にParticipatory Videoを論じる書籍も出版されている（White 2003）。またInsightShareも独自の解説書をインターネット上で公開している（Lunch and Lunch 2006）。これらの資料を事前に読んでいれば、本プロジェクトに必要なアイデアが得られたかもしれない。しかし、参加型の映像制作はすべてが参加者次第であり、制作をとりまく状況は刻一刻と変化する。したがって、しっかりとしたプランを立てておくことよりも参加者とのやりとりのなかで臨機応変に事態に対処する能力を養っておく必要があることを痛感した。これは言うまでもなく記録映画の制作においても、また人類学的な調査においても同じことである。

現場における試行錯誤が基本だとしても、同じバカ族の先住民組織を対象とした映像制作がどのように行われ、完成した作品がどのように生かされているのかということは十分に調べておく必要がある。OKANIは2009年にInsightShareと共同して映像作品を制作している。そのプロジェクトは国連開発計画（UNDP）の支援を受けて実施されたもので、「気候変動が先住民に与える影響」をテーマにFacing Changes in African Forestsと題する短編が制作されている。この作品はインターネット上で公開されており、関連資料もInsightShareのウェブサイトで閲覧することができる¹⁷。そして、筆者が現地で出会ったとおり、InsightShareは2011年の3月から4月にかけてOKANIのもとで新たにワークショップを実施している。

OKANIとInsightShareの共同の実態を明らかにすることは今後の重要な課題の一つである。さらに、このような援助がどのように生かされているのかという点に関しては、本プロジェクトも含めて追跡調査を行う必要がある。また、この調査は先住民組織の活動全般を解明する方向にも展開させなければならないだろう。先住民組織の活動をサポートすれば、先住民の権利を守ることができるという前提は検討が必要である。本プロジェクトの意義もまた、その点において根本的に問い直されることになるかもしれない。

本プロジェクトが端緒を開いたことによって、ASBAKとCADDAPという組織がParticipatory Videoを知ることになった。筆者にとって最も印象深かったことは、このワークショップにおける制作の過程と上映後の討論において、複数の先住民組織のスタッフ、バカ族と他の民族の人々、カメルーンの映画作家たちと研究者、そして筆者という立場の異なる者が一堂に会し、真摯にバカ社会の現状と課題について話し合ったということである。そして、筆者は参加者の言動から多くを学ぶことができた。これらのことは本プロジェクトを実施しなければ起こりえなかったこと、知りえなかったことである。

作品は最終的に筆者が帰国後に修正し、日本語字幕とフランス語字幕が完成している。作品

¹⁶ クリーブ・ロバートソンとジャクリ・ショウはReal Timeという映像制作の組織を運営している。
<http://www.real-time.org.uk/>（2011年10月24日）

¹⁷ Baka People: Facing changes in African forests
<http://insightshare.org/watch/video/african-forests>（2011年10月24日）

の公開方法、活用方法についてはASBAKやCADDAPとの協議が必要だが¹⁸、今後は作品の上映と討論の実施を通じて、さらに様々な立場の人々と共に検討を進めてゆきたいと考えている。筆者のこのようなプロジェクトは、いわば対象となる人々への「干渉、介入」である。学術的には、このような応用性の高いアプローチは承認されにくい状況があるものの、近年では、研究者が積極的に社会や組織、人々が抱える問題に関わることによって共に事態の改善をはかるという取り組みが広がっている。特に欧米では映像を活用した「干渉、介入」(intervention)の試みが数々の成果をあげている(Pink 2008)。

映像を活用した応用性の高い人類学のことを「応用映像人類学(Applied Visual Anthropology)」と呼ぶようになってきている。この分野は、「学術的な目的のために調査研究を行うわけではない」とも言われているが(Pink 2005) 調査に基づいて対象となる人々の認識を明らかにできたとすれば、それは人類学的な研究であると言えるのではないだろうか。今後にわたって研究を進めてゆく上で、また、研究の対象となる人々が直面している現実に研究者が共に向き合っていく上で、映像メディアが果たす役割はますます大きくなってきている。2012年に予定している調査において、筆者は今回のプロジェクトを通じて明らかになったことを踏まえて、新たな課題に取り組んでゆくつもりである。

参考文献

<日本語文献>

- 安岡宏和 2011年 『バカ・ピグミーの生態人類学 - アフリカ熱帯雨林の狩猟採集生活の再検討 - 』 京都：京都大学アフリカ地域研究資料センター。
山登義明 2006年 『ドキュメンタリーを作る - テレビ番組制作・授業と実践』 京都：京都大学学術出版会。

<外国語文献>

- Hewlett, B. 2000. "Central African Government's and NGO's Perception of Baka Pygmy Development, in Peter P. Schweitzer, M. Bieseke, and Robert K. Hitchcock (eds.), *Hunters and Gatherers in the Modern World: Conflict, Resistance and Self-Determination*, Berghahn Books.
- Joiris, Daou V. 1998. *La Chasse, La Chance, Le Chant: Aspects du Systeme Rituel des Baka du Cameroun*, These presentee pour l'obtention du grade de Docteur en Sciences Sociales, Universite Libre de Bruxelles.
- Lunch, Chris and Lunch Nick. 2006. *Insights into Participatory Video: A Handbook for the Field*, <http://insightshare.org/resources/pv-handbook> (2011年10月24日)
- Pink, Sarah. 2005. *The Future of Visual Anthropology: Engaging the Senses*, Routledge.
(ed.). 2008. *Visual Interventions: Applied Visual Anthropology*, Berghahn Books.
- Shaw, Jackie and Clive Robertson. 1997. *Participatory Video: A Practical Approach to Using Video Creatively in Group Development Work*, Routledge.
- White, Shirley A. 2003. *Participatory Video: Images that Transform and Empower*, Sage Publications.

¹⁸ 作品はYoutubeの筆者のチャンネルで公開する予定である。
<http://www.youtube.com/user/emboamboab?blend=5&ob=5#p/u>